

1に収束する無限級数とその応用

Infinite series converging on 1 and its applicability

田尾 大和・北山 さくら・大谷 真太郎
Yamato Tao Sakura Kitayama Shintaro Ohtani

I 研究動機

無限個の数を足しているにもかかわらず、1に限りなく近づいていくということに魅力を覚え、それに当てはまる数列の一般項を導こうと考えた。のちにさまざまな数に応用することができるかと期待しているため、1に収束させることにこだわっている。

II 研究目的

- ① 1に収束する無限級数の条件を満たす一般形の式を導くこと。
- ② 例外パターンをできるだけみつけること。
- ③ 1に収束する無限級数を応用すること。

III 研究内容

① 1に収束する無限級数の条件を満たす一般形の式を導く。

①-i 第一法則 無限数列の和が $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n}{n+m}$ になる数列を作る。

一般に、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n}{n+m}$ が1に収束することが知られているので、和がこの形になるときの数列を導けばよい。

(i) $m=1$ のとき

$S_1 = \frac{1}{2}, S_2 = \frac{2}{3}, S_3 = \frac{3}{4}, \dots$ となるには、

$$a_1 = \frac{1}{2}, a_2 = \frac{2}{3} - \frac{1}{2}, a_3 = \frac{3}{4} - \frac{2}{3}, \dots \text{であればよい。}$$

$\therefore a_1 = \frac{1}{2}, a_2 = \frac{1}{6}, a_3 = \frac{1}{12}, \dots$ となる。

一般項 $\{a_k\} = \frac{1}{k(k+1)}$ が得られる。

(ii) $m=2$ のとき

$S_1 = \frac{1}{3}, S_2 = \frac{2}{4}, S_3 = \frac{3}{5}, \dots$ となるには、

$$a_1 = \frac{1}{3}, a_2 = \frac{2}{4} - \frac{1}{3}, a_3 = \frac{3}{5} - \frac{2}{4}, \dots \text{であればよい。}$$

$\therefore a_1 = \frac{1}{3}, a_2 = \frac{1}{6}, a_3 = \frac{1}{10}, \dots$ となる。

一般項 $\{a_k\} = \frac{2}{(k+1)(k+2)}$ となる。

(iii) $m=m$ のとき

具体的な数値を複数代入して一般項を予想し、証明した結果一般項が得られた。よって、次式が導かれる。

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m)(n+m-1)} = 1 \quad (m \text{ は自然数})$$

これを第一法則とする。

(以下証明)

$$m = 1 \text{ のとき、} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n(n+1)} = 1$$

$$m = k \text{ のとき、} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{k}{(n+k)(n+k-1)} = 1 \text{ と仮定する。}$$

$$m = k + 1 \text{ のとき、} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(k+1)}{(n+k+1)(n+k)} = 1 \text{ を示せばよい。}$$

$$a_n = \frac{k}{(n+k)(n+k-1)} \text{ とすると、} a_{n+1} = \frac{k}{(n+1+k)(n+1+k-1)} \text{ である。}$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} a_{n+1} = \sum_{n=1}^{\infty} a_n - a_1 + a_{\infty+1} = 1 - \frac{k}{k(k+1)} + 0 = \frac{k}{k+1}$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(k+1)}{(n+k+1)(n+k)} = \sum_{n=1}^{\infty} a_{n+1} \times \frac{k+1}{k} = \frac{k}{k+1} \times \frac{k+1}{k} = 1$$

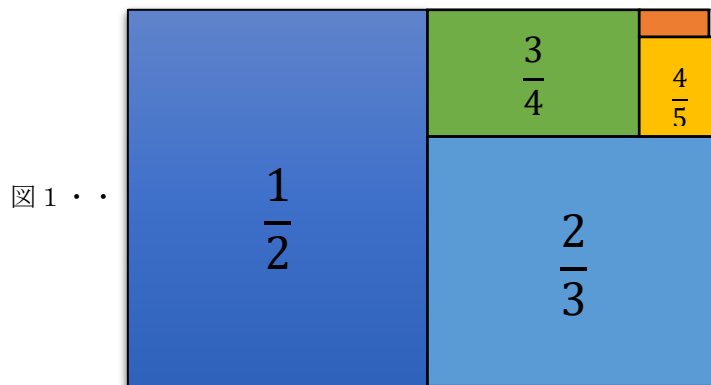
∴ 数学的帰納法の定義より、 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m)(n+m-1)} = 1$ が成り立つ。

①-ii 長方形を規則に従って分割し、面積を埋めていく方法で導く。

規則とは分母と分子の値の差を 1 に保ったまま、分母と分子を限りなく大きくしていくことである。

(i) 下図の操作を数列で表す。(初項は $\frac{1}{2}$)

なお、図中の分数の割合で、残りの面積を分割していく。



$$\textcircled{1} \quad a_1 = \frac{1}{2}, a_2 = \left(1 - \frac{1}{2}\right) \frac{2}{3} = \frac{1}{3}, a_3 = \left(1 - \frac{1}{2} - \frac{1}{3}\right) \frac{3}{4} = \frac{1}{8}, a_4 = \left(1 - \frac{1}{2} - \frac{1}{3} - \frac{1}{8}\right) \frac{4}{5} = \frac{1}{30}$$

$$\textcircled{2} \quad a_1 = \frac{1}{1 \cdot 2}, a_2 = \frac{2}{1 \cdot 2 \cdot 3}, a_3 = \frac{3}{1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4}, a_4 = \frac{4}{1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 5}$$

$$\textcircled{3} \quad a_1 = \frac{1}{(1+1)!}, a_2 = \frac{2}{(2+1)!}, a_3 = \frac{3}{(3+1)!}, a_4 = \frac{4}{(4+1)!}$$

$$\textcircled{4} \quad \therefore a_k = \frac{k}{(k+1)!} \quad (= \frac{(k+0)1!}{(k+1)!})$$

$$\textcircled{5} \quad \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \frac{k}{(k+1)!} = 1$$

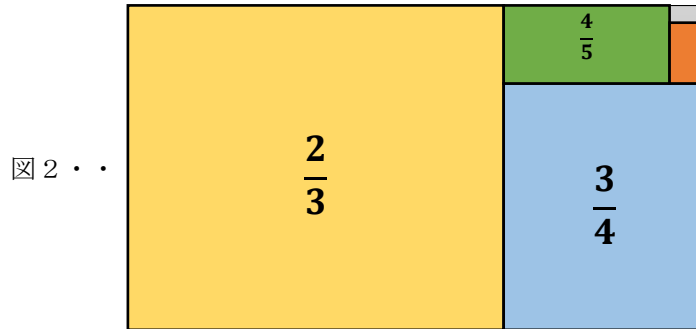
(ii) 右下図の操作を数列で表す。(初項は $\frac{2}{3}$)

$$\textcircled{1} \quad a_1 = \frac{2}{3}, a_2 = \left(1 - \frac{2}{3}\right) \frac{3}{4} = \frac{1}{4}, a_3 = \left(1 - \frac{2}{3} - \frac{1}{4}\right) \frac{4}{5} = \frac{1}{8}, a_4 = \left(1 - \frac{2}{3} - \frac{1}{4} - \frac{1}{8}\right) \frac{5}{6} = \frac{1}{30}$$

$$\textcircled{2} \quad a_1 = \frac{(1+1)2!}{(1+2)!}, a_2 = \frac{(2+1)2!}{(2+2)!}, a_3 = \frac{(3+1)2!}{(3+2)!}, a_4 = \frac{(4+1)2!}{(4+2)!}$$

$$\textcircled{3} \quad \therefore a_k = \frac{(k+1)2!}{(k+2)!}$$

$$\textcircled{4} \quad \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \frac{(k+1)2!}{(k+2)!} = 1$$



(iii) 初項を $\frac{m}{m+1}$ に変えて同様の操作を行う。

これは $a_{n+1} = (1 - \sum_{k=1}^n a_k) \frac{(n+m)-1}{(n+m)}$ を a_n について解けば一般項が得られるが、複雑であるため、

具体的な数値を複数代入して、一般項を予想し、数学的帰納法で証明をした結果、一般項が得られた。よって、次式が導かれる。

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(n+m-1)m!}{(n+m)!} = 1 \quad (m \text{ は非負整数})$$

これを第二法則とする。

(以下証明)

$$m = 1 \quad \text{のとき、} \quad \sum_{n=1}^{\infty} \frac{n}{(n+1)!} = 1$$

$$m = k \quad \text{のとき、} \quad \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(n+k-1)k!}{(n+k)!} = 1 \quad \text{と仮定する。}$$

$$m = k + 1 \quad \text{のときの、} \quad \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(n+k+1-1)(k+1)!}{(n+k+1)!} = 1 \quad \text{を示せばよい。}$$

$$a_n = \frac{(n+k-1)k!}{(n+k)!} \quad \text{とすると、} \quad a_{n+1} = \frac{(n+1+k-1)k!}{(n+1+k)!} \quad \text{である。}$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} a_{n+1} = \sum_{n=1}^{\infty} a_n - a_1 + a_{\infty+1} = 1 - \frac{k \cdot k!}{(k+1)!} + 0 = \frac{1}{k+1}$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(n+k+1-1)(k+1)!}{(n+k+1)!} = \sum_{n=1}^{\infty} a_{n+1} \times \frac{(k+1)!}{k!} = \frac{1}{k+1} \times (k+1) = 1$$

∴ 数学的帰納法より、 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(n+m-1)m!}{(n+m)!} = 1$ が成り立つ。

(なお、 $m=0$ のときは計算した結果 1 になった。)

①-iii 第三法則 $\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \frac{k}{2^k}$ の 2 の部分を 3, 4, ... と変えていくことで導く。

$S_n = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{(n+1)^k}$ に値を代入し、収束の仕方を観察する。

$$S_1 = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{2^k} = 2 \quad S_2 = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{3^k} = \frac{3}{4} \quad S_3 = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{4^k} = \frac{4}{9}$$

$$S_n = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{(n+1)^k} = \frac{n+1}{n^2} \text{ となると予想できる。}$$

(以下証明)

$S = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{(n+1)^k}$ とする。 $S - \frac{S}{n+1} = \frac{nS}{n+1}$ を用いると、

$$S_t = \frac{1}{(n+1)^1} + \frac{2}{(n+1)^2} + \frac{3}{(n+1)^3} + \dots + \frac{t}{(n+1)^t}$$

$$\rightarrow) \quad \frac{1}{n+1} S_t = \frac{1}{(n+1)^2} + \frac{2}{(n+1)^3} + \dots + \frac{t-1}{(n+1)^t} + \frac{t}{(n+1)^{t+1}}$$

$$\frac{n}{n+1} S_t = \frac{1}{(n+1)^1} + \frac{1}{(n+1)^2} + \frac{1}{(n+1)^3} + \dots + \frac{1}{(n+1)^t} - \frac{t}{(n+1)^{t+1}}$$

$$= \frac{\frac{1}{n+1} \left\{ 1 - \left(\frac{1}{n+1} \right)^t \right\}}{\left(1 - \frac{1}{n+1} \right)} - \frac{t}{(n+1)^{t+1}}$$

$$\therefore \lim_{t \rightarrow \infty} \frac{n}{n+1} S_t = \frac{\frac{1}{n+1}}{\left(1 - \frac{1}{n+1} \right)} = \frac{1}{n}$$

$$\therefore \lim_{t \rightarrow \infty} S_t = \frac{n+1}{n^2}$$

(証明完了)

故に、1 に収束する無限級数を考えると、

$$S_n \cdot \frac{n^2}{n+1} = 1$$

となるゆえ次式が導かれる。

$$\sum_{k=1}^{\infty} \frac{k}{(n+1)^k} \cdot \frac{n^2}{n+1} = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{kn^2}{(n+1)^{k+1}} = 1$$

これを第三法則とする。

なお、無限等比級数の初項を $r-1$ 、公比を r としても 1 に収束する無限級数が得られるが、省略する。

② 例外パターンをできるだけみつける。

ゴールドバッハ・オイラーの定理というものを発見した。

累乗数 P を s 乗根したときに自然数となる自然数 (s は2以上の任意の自然数) と定義する。

さらに、自然数のなかで、 P に該当する自然数を小さい順に $P_1, P_2, P_3, \dots, P_n, \dots$ とおくと、

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{P_{n-1}} = 1 \quad \text{とあらわすことができる。}$$

③ 1 に収束する無限級数を応用する。(一般化など)

③- i 第一法則の応用

第一法則の分母の項の差を変化させ、収束の仕方を観察する。

(i) 差が1のとき (第一法則)

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m)(n+m-1)} = 1$$

(ii) 差が2のとき

すなわち $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+1)(n+m-1)}$ のとき

$\frac{m}{(n+m+1)(n+m-1)} = \frac{m}{2} \left(\frac{1}{n+m-1} - \frac{1}{n+m+1} \right)$ と部分分数分解できるゆえ

$$\begin{aligned} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+1)(n+m-1)} &= \frac{m}{2} \left\{ \left(\frac{1}{m} - \frac{1}{m+2} \right) + \left(\frac{1}{m+1} - \frac{1}{m+3} \right) + \dots + \left(\frac{1}{n+m-1} - \frac{1}{n+m+1} \right) \right\} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{m}{2} \left(\frac{1}{m} + \frac{1}{m+1} - \frac{1}{n+m} - \frac{1}{n+m+1} \right) \\ &= \frac{m}{2} \left(\frac{1}{m} + \frac{1}{m+1} \right) \quad \left(= \frac{2m+1}{2(m+1)} \right) \end{aligned}$$

この形に収束することがわかった。

(iii) 差が3のとき

すなわち $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+2)(n+m-1)}$ のとき

$\frac{m}{(n+m+2)(n+m-1)} = \frac{m}{3} \left(\frac{1}{n+m-1} - \frac{1}{n+m+2} \right)$ と部分分数分解できるゆえ

$$\begin{aligned} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+2)(n+m-1)} &= \frac{m}{3} \left\{ \left(\frac{1}{m} - \frac{1}{m+3} \right) + \left(\frac{1}{m+1} - \frac{1}{m+4} \right) + \dots + \left(\frac{1}{n+m-1} - \frac{1}{n+m+2} \right) \right\} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{m}{3} \left(\frac{1}{m} + \frac{1}{m+1} + \frac{1}{m+2} - \frac{1}{n+m} - \frac{1}{n+m+1} - \frac{1}{n+m+2} \right) \\ &= \frac{m}{3} \left(\frac{1}{m} + \frac{1}{m+1} + \frac{1}{m+2} \right) \quad \left(= \frac{3m^2+6m+2}{3(m+1)(m+2)} \right) \end{aligned}$$

この形に収束することがわかった。

差が 2 のときと比較すると、括弧外の分数の分母が 2 から 3 に変わり、括弧内の項数も 2 つから 3 つに変わった。

(iv) 差が k のとき

すなわち $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+k-1)(n+m-1)}$ のとき

同様にして

$$\begin{aligned} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+k-1)(n+m-1)} &= \frac{m}{k} \left(\frac{1}{m} + \frac{1}{m+1} + \frac{1}{m+2} + \dots + \frac{1}{m+k-1} \right) \\ &= \frac{m}{k} \left(\sum_{j=1}^k \frac{1}{m+j-1} \right) \dots \dots (*) \end{aligned}$$

以上の過程から第一法則の分母の項の差を変化させたときに、その収束する値の予測をすることができるようになった。

ちなみに、(*) の逆数を元の式 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+k-1)(n+m-1)}$ にかけて、1 に収束する無限級数が得られる。

③- ii 第二法則の応用

第二法則を導く手順を式化したものである漸化式 $a_{n+1} = (1 - \sum_{k=1}^n a_k) \frac{(n+m)-1}{(n+m)}$ を変化させ、より一般化させる。

ここで、 $a_{n+1} = (1 - \sum_{k=1}^n a_k) \frac{(n+m)-1}{(n+m)}$ という式はそれまでの項の総和を 1 からひいたものに $\frac{(n+m)-1}{(n+m)}$ をかける

ということである。図とこの式を変化させて、 $a_{n+1} = (1 - \sum_{k=1}^n a_k) \frac{\ell(n+m)-1}{\ell(n+m)}$ とし、さらに一般化させる。ち

なみに $\ell=1$ のときが第二法則の $m=m+1$ のときである。

(i) $\ell=2$ のとき

各項は

$$a_1 = \frac{1}{2} \quad a_2 = \frac{1}{2} \cdot \frac{3}{4} \quad a_3 = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{5}{6}$$

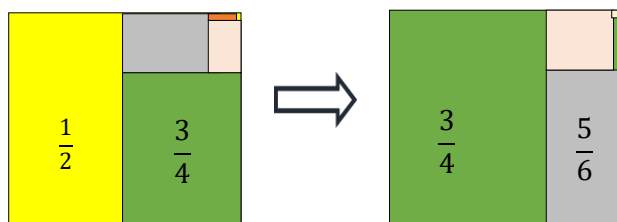
規則性より

$$a_n = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4} \cdot \dots \cdot \frac{1}{2(n-1)} \cdot \frac{2n-1}{2n} \cdot \frac{2n-1}{2^n \cdot n!}$$

ここで、初項を $\frac{1}{2}$ から $\frac{3}{4}$ に移して考える。各項は

$$\begin{aligned} a_1 &= \frac{3}{4} \\ a_2 &= \frac{1}{4} \cdot \frac{5}{6} \\ a_3 &= \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{6} \cdot \frac{7}{8} \end{aligned}$$

図 3 ...



規則性より

$$a_n = \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{6} \cdots \frac{1}{2n} \cdot \frac{2n+1}{2(n+1)} = \frac{2n+1}{2^n(n+1)!}$$

このように、初項を変化させていき、最終的に初項を $\frac{2m-1}{2m}$ とし、 $a_{n+1} = (1 - \sum_{k=1}^n a_k) \frac{2(n+m)-1}{2(n+m)}$ の

一般項を考える。

$$a_1 = \frac{2m-1}{2m}$$

$$a_2 = \frac{1}{2m} \cdot \frac{2m+1}{2(m+1)}$$

$$a_3 = \frac{1}{2m} \cdot \frac{1}{2(m+1)} \cdot \frac{2m+3}{2(m+2)}$$

規則性より

$$a_n = \frac{1}{2m} \cdot \frac{1}{2(m+1)} \cdots \frac{1}{2(n+m-2)} \cdot \frac{2(n+m-1)-1}{2(n+m-1)} \frac{\{2(n+m-1)-1\}(m-1)!}{2^n(n+m-1)!}$$

(ii) $\ell=1$ のとき

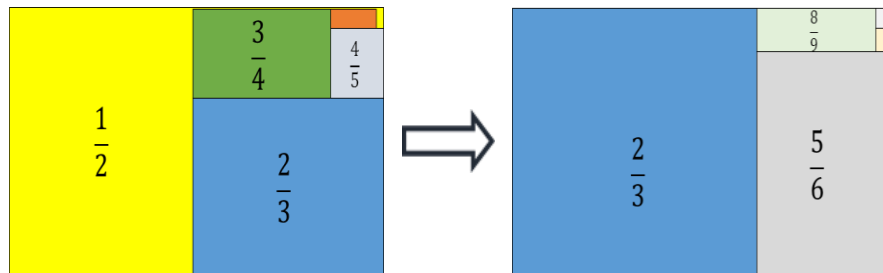
各項は

$$a_1 = \frac{2}{3}$$

$$a_2 = \frac{1}{3} \cdot \frac{5}{6}$$

$$a_3 = \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6} \cdot \frac{8}{9}$$

図 4 ...



規則性より

$$a_n = \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6} \cdots \frac{1}{3(n-1)} \cdot \frac{3n-1}{3n} \frac{3n-1}{3^n \cdot n!}$$

ここで、分母は3の倍数の積という規則性を保つために、初項を初めから $\frac{2}{3}$ に移して操作を行っている。

また、 $\ell=2$ のときと同様に初項を移していき、初項を $\frac{3m-1}{3m}$ とし、 $\ell=3$ のときの数列を考える。

各項は

$$a_1 = \frac{3m-1}{3m}$$

$$a_2 = \frac{1}{3m} \cdot \frac{3m+1}{3(m+1)}$$

$$a_3 = \frac{1}{3m} \cdot \frac{1}{3(m+1)} \cdot \frac{3m+3}{3(m+2)}$$

規則性より

$$a_n = \frac{1}{3m} \cdot \frac{1}{3(m+1)} \cdots \frac{1}{3(n+m-2)} \cdot \frac{3(n+m-1)-1}{3(n+m-1)} \frac{\{3(n+m-1)-1\}(m-1)!}{3^n(n+m-1)!}$$

これを $\ell=2$ のときの最終段階の a_n と比較すると、分母、分子ともに2の部分が3に変わっている。

(iii) $\ell = \ell$ のとき

具体的数値を代入したときと同様にすると、最終段階の a_n は

$$a_n = \frac{\{\ell(n+m-1)-1\}(m-1)!}{\ell^n(n+m-1)!}$$

となる。

この数列の無限級数は図5の面積が1の長方形を無限に埋めていくという意味を持つ。

故に、 $\sum_{n=1}^{\infty} a_n = 1$

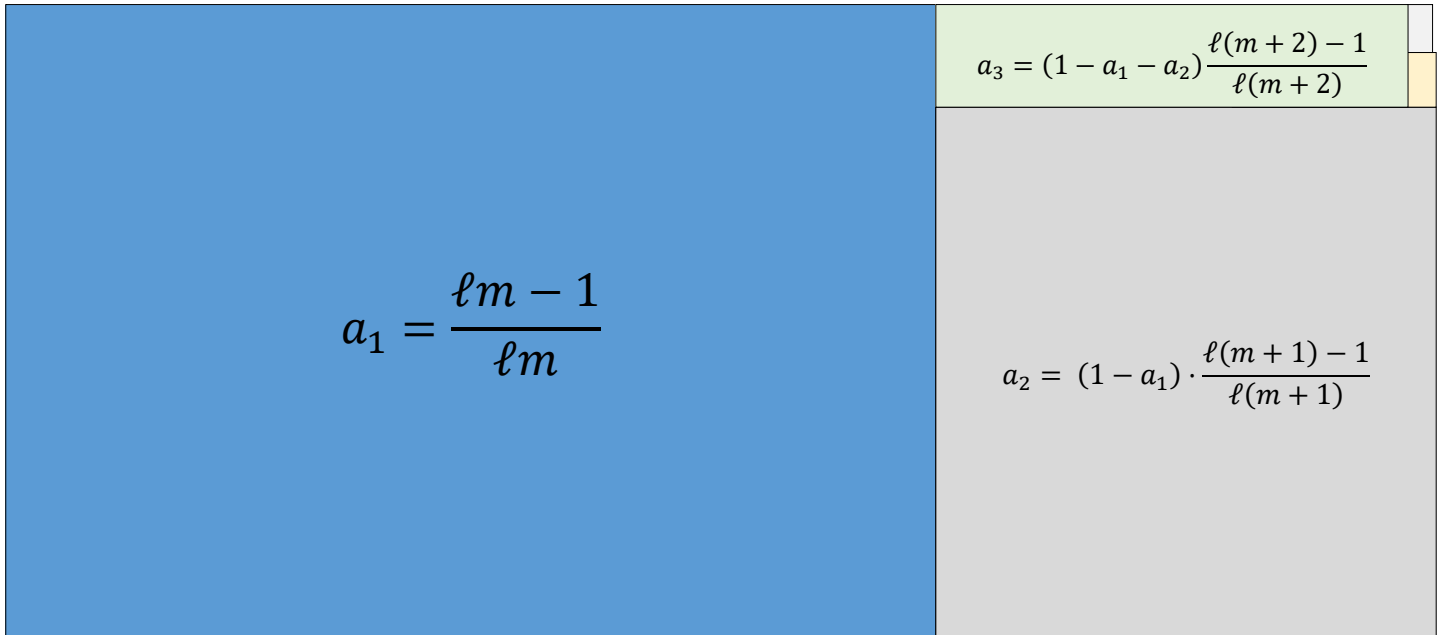


図5

IV 結果

① 4つの1に収束する無限級数の条件を満たす一般形の式（法則）を導くことができた。

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m)(n+m-1)} = 1 \quad (m \text{ は自然数}) \quad (\text{第一法則})$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(n+m-1)m!}{(n+m)!} = 1 \quad (m \text{ は非負整数}) \quad (\text{第二法則})$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{nm^2}{(m+1)^{n+1}} = 1 \quad (m \text{ は自然数}) \quad (\text{第三法則})$$

② 例外として、ゴールドバッハ・オイラーの定理を見つけた。

③ 第一法則の分母の項の差を変化させたときに、その収束する値の予測をすることができるようになった。

差が k のとき
$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{m}{(n+m+k-1)(n+m-1)} = \frac{m}{k} \left(\sum_{j=1}^k \frac{1}{m+j-1} \right)$$

④ 第二法則をより一般化させることができた。

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{\{\ell(n+m-1)-1\}(m-1)!}{\ell^n(n+m-1)!} = 1$$

V 謝辞

今回の研究を行うにあたり、お世話になった先生方に、厚く御礼申し上げます。

VI 参考文献

数研出版 数B

数研出版 数III

YEO・エイドリアン著、久保儀明・蓮見亮訳（2008） 『eとπの話』 青土社

Lluis Bibiloni, Pelegri Viader, and Jaume Paradis(2006) “On a series of Goldbach and Euler”pp.206-209

(https://www.maa.org/sites/default/files/pdf/upload_library/22/Ford/bibiloni206.pdf)